

# ライフプランニングとしての

## 幼児教育

牛島義友



年をとつたら人々自適の生活に入れるかと思うと中々そ  
うはいかない。特に日本人はよく働かされているようであ  
る。就業率を見ると、六十五歳—六十九歳の男の五十二・  
四%、七十歳—七十四歳までの男の三十四・六%は仕事を  
している。この率は欧米の人より倍以上高い率である。

私も大学を出てから五十年間働き続けたわけであり、こ  
んなにいつまでも働くのならば、何も急いで早く働き始め  
る必要もなかろう。労働開始時期までに十分の期間をと  
り、豊かな生活経験をなし、個性を十分生かした悔いる

ことのない幼少年期を送ることが必要ではなかろうか。  
人よりも少しでも早く学校に入り、かけ足で卒業すること  
が、どれだけの意味があらうか。学齢前の幼児期にやら教  
育だ、勉強だと騒ぎ立て、零歳児からの教育などと言うの  
は、育児ノイローゼの徵候かもしれない。もっとも各時期  
においてできるだけ豊かな生活経験を持たせるというのな  
ら正しいことであるが、よい学校への入学を目指しての無  
駄のない計画的指導を行なえというのならば、それは今日  
の受験勉強一辺倒のゆがめられた教育につながるものであ  
る。

今日は学校教育においてもゆとりのある教育が要求されているが、幼児教育においてはもっと遊びを中心とした豊かな生活経験が必要である。このような受験教育とか、知育偏重の競争社会にかり立てられるにはマスクミなどによる情報操作も関係がある。たとえば乱塾時代などという言葉を発明して学習塾の繁栄を説き、我が子どもここに通わせなければ取り残されてしまうとの不安をかき立てる。

私の身辺を見ていると、ピアノや水泳、野球クラブなどには通わせているが、別に学習塾にはやつっていないものも少なくない。今日の子ども達の生活環境を考えれば、親がこのようなスポーツの場を配慮してやることは、当然のことではあるが、親としては勉強が遅れてしまいかの不安と戦いながらやっているらしい。親もまた大らかな気持で子ども達と一緒に生活を楽しむことができないものである。子どもを育てるということは自信がなく、しかも勇氣と決断を必要とすることがある。この親を不安に追いう。

今日の受験勉強的人間形成の欠点は創造的知性と他人の立場にも理解をもつ協力的な態度の欠如であろう。このような点は幼少年期の自由な遊びの生活、仲のよい友達関係によつてもつとも自然に養なわれる。子どもを自由にのばしたい、子どもの童心を傷つけたくない、幼き日に生命の尊さと、思いやりの心を教えたいた、との親の自然の願いを第一とする教育環境をつくりたい。

次に早く大人にするのではなく、幼き日は幼きままに、すなわち、親とのスキンシップによる愛情の必要な時は豊かに愛にひたり、想像的知性の発達する時にはメルヘンの世界に遊び、社会性にめざめた時は終日友と一緒に暮し、知識生活時代に入れば苦心して問題を解いたり、工夫をこらして何かを作り出す発明、発見の喜びを経験させたい。時間は充分かけ、又必要な玩具や教材は充分用意して。

\* \* \*